



カット・鈴木啓之

わが年頭所感

医療最前線で活躍中だったり、引退はしたものの趣味の世界で輝いていたり……今年の目標や意気込みを伺いました。

療養の傍ら水墨画に専念

望月 武治（93歳）

九十二歳になりました。いつの間にか歳を重ねてしまったような気がいたします。入退院を繰り返していたため、大好きな診療も止めてしまい、目下は療養に専念しております。

慢性腎疾患のため血液透析を一週二回病院でやって貰っております。病院で送り迎えしてくれるので有難いことです。初めは耳が遠いので、送迎車の中でも同乗者と話さず、専ら短歌を作っております。先生に添削して貰うとなんとか短歌らしいものができたようです。

三年前、急速に足腰が弱くなり、背を

クラブは高齢者が多い趣味の集団ですが、その実力は“ギネス級”。いまなお

クラブは高齢者が多い趣味の集団です

曲けてよちよち歩くようになりましたので、好きだったダンスも全然踊れなくなりましたが、二十年余り学んだ水墨画だけはなんとか描けます。六ヶ月前、師事していた佐々木鉄心先生が逝去されました。

今まで教室の講義の五、六日前になって宿題の制作に励んだだけでしたから、同期の先輩十名程は、既に教室を持って教えているのに、私は孫弟子にもかなわない状況だったので、先生逝去の訃報を聞いてからは、急に熱心になり、半年間に四〇〇枚を描く程で、家内も驚いております。

今後も療養の傍ら、六〇冊の指導書一〇〇冊の紙上教室を頼りに水墨画を楽しんでゆこうと考えております。

自己を中心としたる干支談

大黒 勇（95歳）

僕の生年大正二年（一九一三年）の干支は癸丑だから同じ干支は六十年後の昭和四十八年（一九七三年）になる。即ち還暦である。されは第二の還暦は更に六十年後の平成四十一年（二〇三三年）になる。齢は百二十歳。こゝまでは生きられる筈がないのみならず、十二年後の次の干支まですら生きては居まい。然らば平成二十一年己丑は僕の最後の丑年になる。

ついでに述べれば、東京醫大微生物の僕の後継者となった金兌員博士（現名誉教授）は僕より一周り下の丑、干支は乙丑、畏れ多いが昭和天皇は僕より一周り上の丑で干支は辛丑、明治三十四年（一九〇一年）の御誕生である。僕の現役時代、僕より二周り下の大学院生が居た。昭和十二年（一九三七）生れの丁丑、君

は天皇陛下、僕、金君と丑を通して陛下に通ずるのだから、特に奮勵努力せよと勵ましたのであった。

恵方

有泉七種(87)

明けまして、おめでとーいございます。なにはともあれ、平穩な年であることを祈念いたします。

ところで、今年は平成二十一年。大正十一年一月生まれの私は、満八十七歳になる。むかしの数え年なら、八十八歳の米寿。あきらかに、後期高齢者で、大正・昭和・平成の各時代を生きてきたことになる。しかし、大半は昭和の時代で、いわば、波乱の時代を生きてきたことになる。それだけで、新しい年を迎えるより、苦楽の別なく、さまざまなことを思い出す。

たとえば、小学校時代は満州事変で、

テツカフトとタンク(戦車)と爆弾三勇士が出現して、満州国が出来上がった。

中学校時代は支那事変で、火野葦平の「麦と兵隊」がベストセラーとなり、「徐州徐州と人馬は進む、徐州よいか住みよいか……」の歌謡曲が流行した。そして、大

学時代は第二次世界大戦の勃発と敗戦。それから戦後のことなど。思い出せば限りがないが、最大のことといえば、故郷を捨てて、ここ信州の飯田に居をさだめたことである。

私の生まれた在所は山梨県。甲府盆地のほぼ中央の農村で、信州飯田の山峡からは、南アルプス連峰をへだてた、東の空の彼方にある。この地に居をさだめてすでに、五十二年の余。半世紀以上を、この地に生活して来ているのであるが、故郷を思つこともある。若年のころはさほどでもなかったが、還暦をすぎ、古希をすぎ、更に、喜寿をすぎてからは、年々歳々、望郷の思いが募る。といって、いまさら、生まれ在所へ帰ることも出来

ない。

この半世紀余の時代の流れの中で、在所の村は、昭和の合併で町となり、平成の合併で市となつてしまつた。市となつても、農村のたたずまいには大差はないが、生まれ育つた家はない。名前ばかりの本籍と先祖累代の墓所と檀那寺があるだけである。まさに、「骨壺の底にゆられて帰る村」、そのものの故郷であるが、元日の朝には、恵方として、南アルプス大連峰の彼方の空を選擇することになっている。

ふるさととは山のかなたぞ恵方とす
七種

大変各年の年を乗り越え
られるか

佐藤文男(84)

米国が風邪を引くと日本は肺炎と言われていたのが、米国が重症な肺炎となつたのだから、日本は危篤になるのは当然だが、来年一杯で持ち直せるかどつつが

問題だ。「温故知新」歴史は繰り返すで、老人の経験を聴く出番となる。

小生の“人生訓”は、四十、五十はよちよち歩き、六十、七十洩たれ小僧八十、九十働き盛り、百を過ぎれば隠居仕事で一休み。百十で“長寿の祝”人生僅か二百年。人間は“生老病死”と言われるように、始めがあれば終わりが必ず来る。

人間の耐用年数は二百年（たけのうすのうへね）（武内宿禰は二百歳と伝えられている）が限度。明治維新以後、科学方能の世と移り変わり、日本人の神仏に対する畏敬、信仰の念がうすれつつあるのは嘆かわしい。歳末、お伊勢参りと賢島一泊旅行をした。中小学校の教育方針が変わった為か、京都奈良、伊勢の修学旅行が殆んど無くなり敬神仏の念が薄れ、携帯電話、パソコン、テレビが今の若者、男女を支配する世と急激に変革された。

大政奉還から明治、大正デモクラシー左傾の世。昭和政治の軍閥支配による戦

争、敗戦、米国占領政策の続行による米国依存政治、近隣諸国には追従政治と変わり果て、対等に発言できぬ外交は、国の尊厳を著しく失わせてしまった。国内的には、男女同権、労組支配の日教組主導の義務教育が小、中学生の現実の姿となつて社会の有識者の批判の対象となり（ひんじやく）、輿論をかつている。

しかし、原因は教育ではなく、テレビによる動く視線による脳内変化と深夜まで起きている睡眠不足が大きく関与していると思われる。環境による多湿列島海洋国日本に乾燥大陸国の文化、文明を吸収、発展して来たが、百年に一度の米国経済崩壊の世界各国への影響を如何に受け止め、立ち直るかは、すべて過去の叡智に含まれているし、必ず立ち直ると信じている。

具体的方策は各層のリーダーが、
(1) 必ず復活させるといふ確固たる信念を持つ。

(2) 労使ともエゴ（自己中心の考え）

を捨てる。解雇者を救つたため給料（少くとも10%）をカットして首切りを防ぐ、相互扶助精神の実行。

(3) 日本土占来からの共産社会、すくない物を分け合う原点に戻れるかどうかが鍵となる。そのためには、

(4) 資本家を敵として絶えず戦つ共産党の下部組織の考えを放棄しなければならぬ。

経済崩壊は、車、航空優先社会の大国米国より始まった。海に囲まれた列島小国日本は気象変化が激しいので、小型機ヘリコプターは交通手段と事故多発の危険がある。新幹線、電車の方が安全だ。更に電気自動車、自動化操縦の発達が交通事故を減少させる。

一方、人間の本質を変化させるテレビ、携帯機器の規則により幼少時の充分な睡眠と休養により、健全な身体と精神の国民育成となることを行政に容貌、期待する。

「老い」を詠む

横田英夫(89)

先日、評論家の加藤周一氏が「くなられた。その新聞記事の表題に大きく「89」の文字が添えてあった。なにも故人の享年をこんな風に書かなくてもいいのと思ったが、自分も同じ位の年になったかと、暫く紙面を見つめていた。

さて、はつきりと記憶していないが、十五、六年前までは年一回「短歌部」の吟行会が開かれていた。たしか神代植物公園で行われた時に、その日最長老であった富永寅先生が「僕は老いを詠まないことにしている」と言われた。当時先生は八十二歳位であったが、その意気や壮なりと感心したことを思いだす。

後日吾が師、熊谷優利枝先生に報告した所「老いを詠んでも良いのです。足が遅くなった、腰が痛い等ありのままをお詠みなさい」と言われ少し気が楽になっ

た。しかしありのままと言っても、自分が病気になった時に、上田三四一のように美しい歌を、また中城ふみ子のよつな凄絶な歌を果たして詠めるであらうか、全く自信は無い。

年を取ると仕事の上でも日常の行動範囲も狭くなって、歌の題材も限られてくる。身のまわりのこと、家族との付き合い、自信の健康のこと位しか思いつかない。

これからは出来るだけ「生老病死」の対極にあるもの、若さ、健やかさ、生きること等に目を向けて歌を作りたいと思っている。

私の日記帖

土屋忠彦(85)

十一月下旬にデパートの書籍部に行き来年のカレンダーと一緒に日記帖を買った。カレンダーの方は家内が好きなのでめぐり、だが、私の日記帖はこの年末で

五年間の日記が終わるからである。

私の日記は戦後の頃から付けていたものだが、或る年嫌な事があってそれ迄の日記帖はすべて破棄してしまった。その後数年して再び五年物の日記をつけ始め今日まで続いているが、日記と言ってもその日の出来事とか自分の行った事位の所で、余り書くスペースも無いが、毎日の天気と気温は欠かさず記入している。それだけの日記である。それでも長年に亘って、その日の事を書き残しておく時には三年前とか五年前の事が思い出されて嬉しい事もあったりする。

五年前の一月には、自動車の運転免許の更新(大型二と大自二)が出来たし、六月には旧制の広島一中の最終の同窓会が宮島で催され、翌日は数人の友と弥山に登った事も書かれている。また十三年間愛用したオートバイを下取りに二二五ccのバイクに乗り換えた事も……。

十八年の九月には、私の第三回の油絵の個展が木屋町画廊で開かれた時の事と

か、一昨年十二月に愛用のワープロが故障して修理不能になり、止むなくパソコンまで買ったが、カシオの社長さん宛に手紙を出したところ、大阪の取り扱い会社を紹介して下さり再びワープロの機械が入手出来た時の嬉しかった事なども目に飛び込んで来ます。その他毎年行われている様な行事の事や大相撲、マラソン、駅伝大会、高校野球等々のスポーツ大会の記録も思い出深く、また記録的な夏の猛暑とか冬の積雪、地震、台風、交通災害なども日記を見ると想い出されま

す。
昨年の正月までは毎年初登山で愛宕山に登ったが、背骨を痛めて四月から山登りを中止して歩く方に変更したが、五十年間の山の想い出はTVや美術展で山の風景を見ると昔の事が浮かんで来ます。
さて次の日記帖を買つに当たり、また五年物にするか三年物にするかと迷つたが八十五歳の現在の体力ではあと何年元気でいられるかを考え、取りあえずスベ

ースの多い三年物の方が良かるつと決めしたが、何日まで続けられるやら……。

三回死ななかつた私

新井隆彦(80)

人間誰しも八十歳にもなれば日常生活でも危ない！と思つた時があると思ひます。しかし私の体験は、避けられる筈がない死をその都度逃れる事が出来ました。本当に奇跡としか言えない体験でした。

「第一回目」

時は昭和二十年、終戦直後のことです。場所は中国、青島です。第一次世界大戦後、多くの日本人がこの青島に居を構え財を成しました。それが終戦により一変して規定の僅かな荷物を持つて内地に引き揚げることになりました。
「どつせ私たちが出た途端に、全ての財産は中国人に取られるに決つています。

学生さんに家財一切をあげます」と言われ、五階建てのアパートに肺結核の同級生一人と一緒に引つ越した次第です。次から次へと帰国する日本人の方から同様に全財産を頂きました。つまり五階建てのアパートに私たち二人だけが全世帯の部屋の鍵を買つて暮らすことになつたのです。

先ず隣の部屋から現金、缶詰、タバコなど持てるものを次から次へと自分の部屋に運びました。一瞬にして大金持ちになつたわけですが、田舎の学校を出て直ぐ中国の学校に入った私は、お金を遣つ事、高価な品に替えて内地に持つて帰るなど何一つ考えていませんでした。しかし数日後から毎日泥棒の集団がやつて来るようになり、下から段々と上の部屋まで大勢の泥棒が集まつてドアを壊して入り込みました。何しろ学校は閉鎖になり暇がありましたので、日本刀を見つけてヤスリで短くして担当を作り、何時でも身に付けていました。

ある日、下で大きな声がありました。覗いてみると中国兵の一団でした。私一人で階段を下りて行き門を開けました。十人位の兵隊で隊長らしきものが「今日からこのビルを接収することになった。ついてはお前を服装検査するから手を挙げろ」と言われました。まずいことに短刀が見つかってしまいました。途端に隊長が鋭い声で命令し全員が銃剣を私に突き付けました。終戦直後の問答無用の時代です。即座に銃殺が考えられました。

「隊長、この場でやりましようか」

隊長は「後ろの庭でやろう」と言っています。私は何とか助かる方法はないかと、五階に病人がいるからお別れしてくると、必死で隊長に頼みました。私は後ろから銃を突きつけられたまま階段を上ることにしました。部屋の前まで来ると、正に戦争映画のようでした。先ず全員がドアの前で構えて隊長を先頭に部屋に突入しました。その間、私は兵隊から銃を突き付けられたままです。

その時、部屋の床の間に雨で濡れた中国の国旗を干してありました。終戦直後ですから国家意識が旺盛です。一同、国旗に敬礼しました。すかさず私は中国の国旗を友好の印に床の間に飾っていたと説明しました。これですっかり状況が一変しました。私は集めておいた米、タバコ、缶詰などをばつと兵隊に持たせました。隊長が今日から下で警備しているから困ったことがあれば来るようにと言いつつ残して一回引き上げました。

兵隊がいなくなった途端に腰が抜けて立てなくなりました。病人の同級生に危うく死刑になるところだったと話している最中に、また兵隊がドアを強く叩きました。やっぱり俺は死刑になるのかと震えながらドアを開けると、一人の兵隊が「这是不要」といいながらアスバラガスの缶詰を返しに来たのでした。要らないなら何もドアを叩いて返すことはないだろうと、私の寿命がまた縮みました。

「第二回目」

数年後、内地に引き揚げる医専を卒業して北海道の日高で診療所に勤務していました。冬厳寒時の往診は大変でした。村長から貰った航空兵の毛皮服を着込み、オートバイで十数キロの山に向かいました。何回か通った道ですから曲がりくねった雪の山道をスピードを出して登り、崖の上でカーブを曲がった途端、目の前に滝が凍って道路を塞いでいるのが見えました。

私は大型オートバイで猛烈なスピードです。左は何百米メートルの断崖絶壁です。道はオートバイの長さ一杯の狭い雪道でトラックがつけたタイヤの溝です。その瞬間から全く意識がありません。気が付いたら何と麓の方向に向かつてトコトコ走っていました。猛烈なスピードだったので、滝の氷の上で大型オートバイが完全に一回転したのです。

普通のスピードでしたら、そのまま谷

底へ落ちていたはずですよ。

「第三回」

同じく日高の村の春の事です。診療所には入院患者が二十人おり、私は別棟の院長住宅に父母と妹と家内の五人で暮していました。かねてからオートバイで村を走ると、春の雪解けで道路が冠水して通れないことがしばしばありました。村長に「万一に備えて病室の屋根に避難の出口を作ってほしいと言いましたところ、この村で生まれた俺がそんなことは考えられないと一笑されましたが、とにかく病室の屋根に大きな穴を開けて貰いました。

それから二か月後、私は妹の就学のごとで東京に帰ることになりました。村民の強い引き留め運動で村の方々が札幌までバスを仕立てて、教授に留任陳情にまで発展した事に感謝しながらの辞任でした。

栃木県の診療所に赴任して数週間後

新聞は一斉に北海道日高の水害を大きく報じておりました。中でも被害が大きかったのは、私のいた新冠診療所周辺で、死者も出たとのことでした。数日後町に出てニュース映画を見ましたら、病室の屋根に開けられた穴から米軍のヘリコプターで患者が脱出する風景が報道され、さらにショックだったのは院長住宅が洪水の濁流に浮かび流されて行って、見える前で日高本線の鉄橋に当たり木つ端微塵になるシーンでした。僅か二カ月前に離村の決心をしていなければ、この住宅の家族のよつに一同無残な結果になるころでした。

「回顧」

昨年三月に六十年に及ぶ診療生活を終えて、只今振り返りますと、生きているのが本当に不思議です。文字通り生きていたのではなく生かされていたのだと、痛感する次第です。

表紙の言葉

佐久間 正人

(川崎市中原区)

バーミアンの石仏

長年の懸案だったアンコールワットへ昨年の春やっと念願をかなえて行ってきました。普通4日間のコースをシエスタつきで7日で廻るゆっくりツアーでしたので、駆け足で追い抜いてゆく他のツアーを尻目に、スケッチしながらガイドブックに載っていないところも回る事が出来ました。

中でもバーミアンの石仏群は最も気に入りました。一面塔、二面塔、四面塔が百塔近くあることで、佛面も温和なお顔、厳しいお顔等様々、中庭に一基だけ立っているもの、顔と顔がくっつきそうに迫っているもの、仏面と同じ高さで捧げるものと同様々で、もう少し若ければ1週間位滞在して此処だけでスケッチしたい思いました。

(第56回日本医家美術展出品作品)

長唄「浦島」を踊って

飯田文良(80)

昨年の一月のことだった。この年の医家邦楽祭の演しものを何にしよつかと相談があった時、師匠から「浦島」はどつでしよつかと提案があった。「浦島」は二十年前、踊りの習い始めの時、以前の師匠花柳吉和師の時に稽古をして、甲府市医師会の新年会の余興に踊って章をもらったことがある。そんなに難しくはなかったよな記憶があつて、それではお願いしますということになった。

現在の師匠花柳彩二郎師はまだ若く稽古の厳しいことで有名な方だった。長年外科手術をしていた関係で、どつしても背骨が前かがみになってしまふ。胸をはつて、背すじを伸ばして」と一時間の稽古の間に何回も注意された。八月の末にいよいよ「二枚扇」の段に入った。これは前回はやらなかったところだった。

「忘れかねたる比翼の蝶の、情……」ではじまるこの段は、浦島が乙姫様との深い愛情に結ばれた幸せの日々を思い、乙姫様恋しと嘆く気持ちを一枚の扇であらわし、踊りが最も高揚する場面である。「せめて薫りの頼り……」の一節は大変難しいので、師匠ははじめから除外すると言った。

高くさし上げた二枚の扇子をさつと手を放して下で受けたり、横に放つて、くるつと廻しとつたり、扇子の骨の間に指を入れてくるくる廻したり、高等技術の連続だった。

何回も扇子を落としてしまつて、少しも前へ進めない。家でも、病院の自分の部屋でも、閉さえあれば「二枚扇」の稽古をした。扇子が要を下にして縦に床の上に落ちると、骨の竹が割れてしまつて使いものにならなくなる。一枚、二枚と師匠から借りた扇子を壊してしまつた。自分の扇子も三枚壊した。本番用に東京に注文して届いた扇子も壊してしまひ、

あわてて新しい扇子を送つてもらつた。扇子を落さないでできるようにしたのは本番の十日前であつた。

十一月二十三日、いよいよ邦楽祭の本番の日になった。舞台上で扇子を落とすのではないかと不安で気が重かつた。

「和田の原、波路はるか……」と釣竿を持つて踊りがはじまつた。何時もより手足がよく伸びるよふな気がした。いよいよ「二枚扇」の段に入った。はじめの難関の扇子さばきが成功してほつとした時、両手を高く上げて、二枚の扇子をくるくる廻すところで、扇子がよく廻つてくれない。これはまずい！と思つた時、次の扇子の横廻し取りで扇子を落としてしまつた。大失敗だった。

それでも終わつた時、師匠は何も責めることなく、よくできましたと誉めて下さつた。いつも辛辣な批評をしてくれる従姉妹が、「白髪の老人になつてからの踊りが一番よかつた」と誉めてくれた時、それでは前段の踊りでどつであつたかと

複雑な気持ちになった。

今年も邦楽祭を目指して、また新しい踊りに挑戦していきたいと思っている。

まだ、先は遠いのだ

ろっか

方波見 康 雄 (82)

「うんしょ。うんしょ。しかし、まだ先は遠いのだろっか」、町田康「宿屋めぐり」(講談社)は、冒頭のこの言葉から始まり延々六百ページに至ってようやく物語の幕を閉じる。とても読み切れないので、本屋の立ち読みで諦めた。一九二六年生まれの私は八十路に足を踏み入れてほぼ三年ちかくこのころで「つや」諦める」という人生の要諦を身に付け始めつつある。

医療ではしかし「あきらめ」は禁句だ。「緩和ケア」ではなおさらのこと。長いあいだ、この現場に身を置いた臨床医として、力と知識と智慧の限りを尽くして献身する。つまり「あきらめない」医療

をひたすら追い求めて来た。その習いが性となり、いつのまにか我が人生の生き方にまで「あきらめない」クセが滲み込んでしまった。

だが人生には終焉のときが訪れる。人は必ず死ぬのだ。これもまた「緩和ケア」の心構えでもある。患者さんと共に「あきらめ」を見極める眼も大切なのだ。八十路に至って身に付きそつな「あきらめの哲学」、どなたかのお役に立てたいと思ったりする。もっとも、そのまえに、当の本人の私に、自分の人生を諦める事態がやってくるにちがいない。

『葉隠聞書』に出て来る「一日仕切り」は好きな言葉だ。「諦め」はすべて、時々刻々に移ろつ時を珠玉のよつに大事にすることから始まる。眼前の此事にも目を凝らす。此事を瑣事として厭わない。これが「一日仕切り」の要諦だろう。この心境、八十路に入ってからでは遅過ぎる。若い時からの修練が必要だ。むかしのお侍は大したものだと感心している。

地吹雪の見えざる岸をみつむと

小出秋光

年の灯やとほく廊下のつきあたり

久保田万太郎

「短い生命を与えられた後、自らを構成する物質を星に返さねばならない」、カント『実践理性批判』の結びに出て来る言葉だ。

構成する物質となると、細胞・ゲノム・遺伝子といふことになる。細分化すると元素・原子・素粒子からニュートリノ・クォークへとたどりつく。どれもがビッグバンから生まれたものだ。

要するに、わが人生も、わがいのちも、地球を仮の宿とする、うつつしみなのだ。冬銀河に煌めく星の瞬きのひとつになるのであれば、八十路を超えて生きた値は充分。先は遠くなくても結構だ。つくつくとそつ思つよつになっている。これまた八十路まで生きた余得なのだろう。

